

## 「日本」の複数性とその境界 ——黒住真先生を送る——

増 田 一 夫

「黒住という名前で岡山生まれですけどけれど、黒住教とは関係ありません」。私自身この台詞を一度ならず耳にしている。初めての相手に対して、黒住真先生がほとんどそのつどおっしゃる言葉なのかもしれない。

この説明は、先生が「日本」の、おもに「近世を中心とした近代への繋がり」という時代の思想を研究されるゆえになおさら必要となる。それだけ先生と研究対象との出会いは必然的であり、運命的に映る。同じ研究者の端くれとしては、羨望もしくは畏敬の念を抱かざるをえない姿である。それをお伝えするためにこそ、編集責任者より「送る言葉」の執筆を打診されたとき、迷いもなくお受けした。ところが、書く段になって悩みを深くしたのは、すでに述べたような人物が駒場を去るにあたって胸中にあまたの思いがざわめくにせよ、それらはいずれも「言葉にならない思い」だったという点である。「思い」の断片を強引に発掘し、生硬かつ不完全に修復したまがいのものを提示するのは避けたかった。そのためにも黒住先生ご本人、ならびに先生をよく知るひとびとと心ゆくまで思い出話に花を咲かせてあの時代を生き生きと甦らせる機会がほしかった。そうすれば「思い」がおのずから「大らか」で「素直」な言葉をまとい、よりたおやかななむけの言葉となって立ち上がることができただろう。

こうも言えるかもしれない。先生が大切にされるキーワードには「複数性」がある。だが、「沈黙の向こうにあるもの」も思想たりうるという理由から、「言葉にならない思い」にもまた重きが置かれている。それならば、いっそ私の「言葉にならない思い」を酌んでいただきたいと申し上げて筆を置いてしまいたくなる、いやパソコンを閉じてしまいたくなるということである。さすがにそれは許されないだろうが。

ふとそのような戯れ言の誘惑に駆られるのも、日本語もおぼつかぬ人間からすると、黒住先生の文章があまりにも自然だからにほかならない。そこには、日本の思想史に登場するおもだった思想家はもとより、儒教、キリスト教、西洋思想の思想家たちが入れ替わり立ち替わり現れ、死生観や自然観、善悪や責任論、公私のあるべきかたちなどを語ってゆく。博覧強記には違いないが、語り口は実に「大らか」で「素直」であり、黒住先生が「いつも不快」を感じたと仰せの本居宣長のように、「減らず口めいたトートロジーにみち、ときには卑劣でさえある」ことはけっしてない。微に入り細に穿って説く

というのとも違う。流れるようにさらりと書かれているため、とある思考の襞に目をとめ、「そこをもっと知りたい」と思っただけで、そき込んだときには、あたかも川面の波がたえず姿を変えるように、話はすでに次の、同じように重要で興味深い論脈へと移ってしまっている……。

ところで、先ほど「パソコン」という語を使った。学生であった頃のわれわれには想像もできず、今日のわれわれには必需品となったこの道具、それはいくつもの光景を思い出させてくれる。専攻室がまだ8号館4階にあった頃、黒住先生はよくそこにいらした。日当たりが良く、窓の外の手の届きそうなところに木の葉が揺れ、授業の区切りには学生の群れが移動する銀杏並木を見下ろせる部屋である。国立大学の法人化がおこなわれつつあった時期、専攻主任が業務の質と量によりふさわしく専攻長となったあの時期、専攻室におもむくと、当時研究科委員だった先生が仕事をしていらした。几帳面に、ぎっしりと、文字通り分刻みに予定が記された手帳——いや、カードだったか？——を携えて。いまから思えば、業務は非常に多岐にわたっていたに違いない。しかしなぜか、私の記憶のなかで黒住先生と結びついているのはパソコンであった。パソコン好きでいらしたとか、機種にこだわりを持たれたとかいうことではない。おもに留学生を対象としたパソコンの貸与に力を注がれていたということである。その姿勢は、デジタルデバイドを回避することによって、なんとか一般の学生との環境格差をなくしてあげたいという深い思いやりに溢れていたと言えよう。

勤勉できめ細かい配慮に満ちた人物に信望が集まるのは当然であった。黒住先生は、2004年秋、文句のない得票数で専攻長に選出された。にもかかわらず、その職に就かれてはいない。辞退されたのではなく、就くことができなかつたのである。休む間もなく働かれて疲労を蓄積されていたのだろう、選挙後まもなく海外出張をされ、12月上旬に帰国されたまま、病に伏してしまわれた。専攻にとっても危機的な事態である。窮状を打開するため、大貫隆先生が急遽専攻長の職に就かれた。黒住先生にも妥当するが、とりわけ大貫先生のご研究のキーワードである「神」を口実に、まさしくデウス・エクス・マキナだと述べたら、ご自身の研究の一側面しか見ていないと叱られるだろうか。

黒住先生と私とではあまり重なるところがない。小地域も部会も異なる。あるとすれば、まったく酒を飲まないという点ぐらいだろう。杉田英明先生も、このごく少数派の貴重な同志である。あるとき、懇親会のくじ引きでこの3名が互いにほど近い席に着いたことがあるが、やや自画自賛を承知で言うなら、その一角には酒を飲まない者同士の連帯感と、きわめて上品な歓談が支配していたものであった。

思想を研究しているという点は、黒住先生と重なる部分である。だからこそ、この文章の執筆者としてお声がかかったのだろう。だが、日本思想はむずかしい。下手に手を出そうとすると、折口信夫が批判する、「又近頃は、哲学畑から出た人が、真摯な態度で神道を研究してゐられる事であるが、中にはお木像にもだん服を著せた様な、神道論も

見受けられるやうである。此なども甚困つたものである」という失態を演じかねない。もっとも、民族的固有性への「純粹帰一」を語る折口とは異なり、黒住先生は「複数性」の人である。西洋もしっかりと視野に入れられており、先生の日本語には「誠実さ (sincerity)」、「無関心な (indifferent)」、「精神的矜持 (noblesse oblige)」といったように、しばしばヨーロッパ語が添えてある。さらに、日本思想を研究する基本姿勢として、先生は「『日本人 (日本思想) は……である』といった命題を提示することには、じつは私自身かなり抵抗感があることも告白しておかなければならない」と書かれている。無前提的に「日本人論」や「日本思想論」を主張することは「怠惰な話」であって、それらは「閉じた確信としてではなく、開かれた問いとして」語られなければならないとも述べられている。その姿勢には満腔の賛意を覚えざるをえない。そしてそれは、地域横断的な視点がつねに要請される専攻において理想的な姿勢でもあるだろう。

しかし、その黒住先生においても、ときとして忽然と境界線が出現する。日本の外部として西欧を位置づける境界線。たとえば、「連帯性」を考察するくだりで「理想主義者 = 原理主義者」という等号が提示されるが、それは次のような指摘に伴われている。「現代の西欧思想は、理性の脱構築を言うけれども、その主張自体が多くは原理主義者の情熱に駆り立てられており、そしてその悪循環に病んでいる」。「日本人にとって理論はやはり外的なものである」という断定が読まれるのもその箇所である。

これは、黒住先生が疑問に付そうとしていた、伝統的な「定型化」への回帰を意味しないのだろうか。理論 - *theorein* (観照) の系譜に対して「ふれる」を中心とした四感を特権化することは、差異を拒む等質的な閉域を作り出さないだろうか。「日本思想の現代的課題は、人間と自然の有限性をふまえたやわらかな理想主義と目的論の導入」というまとめに深い違和感はない。だが、そこにいたる過程でおこなわれる「西欧」「理論」の排除は、閉鎖的な宣長のみぶりの、遙かなる反復のように読めないだろうか。少なくとも、西欧語から発して考えることしかできず、西欧思想の複数性と格闘する「日本人」である私には、西欧の「複数性」と「重層性」をやや窮屈な型にはめているように映る。

「送る言葉」をやや強引にフランス語に置き換えると *mot d'envoi* となる。最後の単語は、英語の *kick-starting, opening shot* に相当する *coup d'envoi* にも用いられている。「送る言葉」は、したがって「開始の言葉」とも読めよう。一見ぶしつけな私の「言葉」は別れの挨拶というよりも、むしろ、「言葉にならない思い」が洗練された姿をまともなまま対話開始の求めとなって噴出したものだろう。黒住先生は好意的に受け取ってくださるだろうか。いずれにせよ、貴重な対話の機会を逸してきたことをこの期におよんで悟った者が、去りゆく同僚をふり向かせ、しばし引き留めながら教を請う。そのような気持ちの現れだと理解していただけることを願っている。もちろん、先生の今後のご健筆を心から祈りながら。